

学科学目	科目の主題	科目の到達目標	ディプロマポリシーの項目番号																
			○:DP達成のために設定された到達目標と関連性がある ※1つの達成目標に対して最大3個まで																
			DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8	DP9	DP10	DP11	DP12	DP13	DP14	DP15		
言語発達障害Ⅱ(評価)	様々な言語発達障害の特性に応じた指導・支援の方法について具体的な検査・評価の結果を指導につなぐことを学ぶ	1. 各検査の特性を理解する 2. 検査の実施法を理解する 3. 検査結果をもとに指導方針を検討することを理解する		○												○	○		
言語発達障害Ⅲ(指導法)	発達障害の種類や発達段階に応じた指導・訓練の方法について具体的な知識を持つ	1. 評価に基づいた指導・訓練案の立案を理解する。 2. 指導・訓練の方法を理解する。 3. 言語・コミュニケーション環境の整備の方法を理解する。		○												○	○		
発声発達障害ⅠA(小児構音障害)	発声発達のメカニズムと正常な構音発達に必要な基礎知識を理解し、発声発達の過程で構音障害を引き起こす要因、構音障害の定義、分類、特性について学ぶ。小児の発達の過程で問題となる機能性構音障害について学ぶ。	1. 正常な構音発達について理解する 2. 構音障害の原因・定義・分類について学ぶ 3. 機能性構音障害について学ぶ		○												○	○		
発声発達障害ⅠB(小児構音障害)	発声発達のメカニズムと正常な構音発達に必要な基礎知識を理解し、発声発達の過程で構音障害を引き起こす要因、構音障害の定義、分類、特性について学ぶ。小児の発達の過程で問題となる機能性構音障害について学ぶ。	1. 器質性構音障害について理解する 2. 口蓋裂に伴う構音障害について学ぶ 3. 構音障害の検査・評価法及び指導法を理解する		○												○	○		
発声発達障害ⅡA(成人)	成人の発声発達障害のうち、音声障害及び運動障害性構音障害について、適切な評価を行うための知識を習得する。はじかに呼吸・発声・発音器官の解剖生理及び発声発語に関わる神経系を理解する。それらの基礎的知識をもとに、発声発語のメカニズムについて学び、その障がいがいである音声障害及び運動障害性構音障害の原因疾患、障がいの発生機序、症状の特徴、評価法について学ぶ。運動障害性構音障害については7つのタイプ分類についても習得する。	1. 呼吸・発声・発音器官の解剖生理及び発声発語に関わる神経系を理解する。 2. 発声発語のメカニズムについて学び、その障がいがいである音声障害及び運動障害性構音障害の原因疾患、障がいの発生機序、症状の特徴、評価法について学ぶ 3. 運動障害性構音障害については7つのタイプ分類についても習得する。		○												○	○		○
発声発達障害ⅡB(成人)	音声障害及び運動障害性構音障害について、適切な評価に基づく治療・訓練を行うための知識を習得する。音声障害について、医学的治療と行動学的治療の内容を理解した上で、言語聴覚士が行う音声治療の直接訓練と間接訓練について学ぶ。運動障害性構音障害については、発声・構音・共鳴、プロソディのそれぞれの問題に即した訓練法を学び、さらに補綴装置の利用や拡大・代替コミュニケーションの技法についても学ぶ。	1. 適切な評価に基づく治療・訓練を行うための知識を習得する 2. 音声障害及び運動障害性構音障害について、言語聴覚士が行う評価と治療(訓練)について学ぶ 3. 補綴装置の利用や拡大・代替コミュニケーションの技法についても学ぶ。		○												○	○		○
発声発達障害Ⅲ(吃音)	この講座では主に発達性吃音をとりあげる。吃音とは具体的にどのような障害であるのか、なぜ生じるのか、言語面や心理面的評価はいつにするのかを学ぶ。次いで、幼児期、学童期(小学生)、成人期(中学生以降)それぞれに必要な支援の方法、「環境調整や言語訓練」はどのようにしたいのかを、吃音に関する問題を実習を交え教授していく。	1. 発達性吃音についての基礎知識を理解する 2. 吃音の検査法・評価法を理解する 3. 各発達段階に応じた指導法を理解する															○	○	○
摂食嚥下障害Ⅰ	摂食嚥下に関わる体の構造と機能、ならびに、それらを制御する脳の機能についての理解を基礎として、正常な摂食嚥下、摂食嚥下障害、摂食嚥下障害の評価法と指導法を学ぶ	1. 摂食嚥下のメカニズムを理解する。発達や加齢による変化についても理解する 2. 摂食嚥下障害の臨床像について理解する 3. 摂食嚥下障害に対する評価法、指導法、外科的対応、補綴的処置について理解する		○												○	○		○
聴覚障害Ⅰ(補聴器・人工内耳)	聴覚障害概論の内容をふまえて、聴覚検査から補聴器・補聴器・人工内耳)の選択・調整・装着効果判定のあり方とそれらに関わる言語聴覚士の役割等について学ぶ。臨床現場に必要となる基礎知識を履修する。	1. 補聴器・人工内耳についての理論・基礎知識を理解する 2. 補聴器などのフィッティング技能、また装着状況下の相違と効果の限界について理解する 3. 臨床現場に参加する際、適切な機器の選択と、各調整手続きの実践を理解する		○		○										○	○		○
聴覚障害Ⅱ(小児)	基本的な聴覚検査から始まり、音を耳で感じる仕組みと聴覚の言語の習得、音響的・身体的な運用に至るまでの発達を見渡し、小児聴覚障害についての基礎知識を学ぶ	1. 小児聴覚の検査・教育システムについて理解する 2. 指導・訓練の家庭と「聴覚学習理論」について理解する 3. 臨床実践の目的と枠組み、言語獲得・習得についての概要と支援法を理解する		○												○	○		○
聴覚障害Ⅲ(成人)	聴覚障害の聴覚機能評価に必要な各種聴覚検査の原理と方法について学ぶとともに、補聴器について理解を深め、聴覚障害者の状況に応じて適切な補聴器適合など聴覚障害者に応じた支援ができる力を身に付ける。	1. 聴覚検査の原理と方法を理解する 2. 補聴器の調整機能や特性について理解する 3. 適切な補聴器適合など聴覚障害者に応じた支援ができる力を身に付ける。		○												○	○		○
音声・言語・聴覚Ⅱ(聴覚系)	正常聴覚機能とその障害に関する基礎事項について習得する	1. 外耳、中耳、内耳から聴覚中枢に至る聴覚伝導路の正常解剖および生理について習得する 2. それぞれの障害に伴って生じる疾患の病態について理解する。 3. 病態評価に必要な聴覚系の検査について解説し、検査の具体的な手技と結果の評価法について習得する		○												○	○		○
言語聴覚障害診断学Ⅰ(小児)	小児の言語・コミュニケーション障害の各領域における検査法や指導法ならびに他職種との連携や仕事を学び、言語聴覚士の役割を理解する。	1. 情報収集・評価の方法を理解する。 2. 指導・訓練法を理解する。 3. 再評価による指導・訓練結果の検討や報告書の作成の方法を理解する。															○	○	○
言語聴覚障害診断学Ⅱ(成人)	失語症・構音障害・高次脳機能障害・聴覚障害などの症状を正しく評価・鑑別診断することや、併せて、随伴する重複症状を科学的に見極めることを学ぶ	1. 言語聴覚障害の症状を正しく評価・鑑別診断できる 2. 主症状に随伴する重複症状を見極め評価できる 3. 言語聴覚障害の全体像を理解・把握し、治療プランを立てる														○	○		○
失語症演習	失語症の情報収集・検査・評価・診断→治療→再評価という実際の臨床方法の演習を行う。ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てることを主眼とする	1. 実際の臨床方法を演習し、ポイントを理解する 2. 報告書の作成や他部門(PT、OT、NS、心理など)とのチームアプローチの実践も学習する 3. ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てる														○	○		○
高次脳機能障害演習	高次脳機能障害の検査・評価方法及び治療について実技演習を通じて学ぶ	1. 高次脳機能障害検査の実践を学ぶ 2. 検査結果から、総合的評価が出来るようにする 3. 評価から、患者や家族への説明が出来るようにする														○	○		○
言語発達障害演習	言語発達障害の臨床に用いる各種の発達検査や知能検査の特性を理解し、検査を実施し、結果を算出する方法を理解する。	1. 各検査の特性を理解する。 2. 各検査が実施できる。 3. 検査の結果をまとめる方法を理解する。		○												○	○		○
発声発達障害Ⅰ(小児)	小児の構音障害の臨床の流れを演習で学ぶ	1. 問診・構音検査・構音器官の検査で情報を収集することを理解する 2. 評価と指導方針の決定について理解する 3. 構音訓練の技法を理解する。各種文書の書き方を理解する。		○												○	○		○
発声発達障害Ⅱ(成人)	運動障害性構音障害及び音声障害について、情報収集・評価(検査)→鑑別診断→訓練プログラムの立案→訓練の実施という実際の臨床方法を学ぶ	1. 実際の臨床方法を演習し、ポイントを理解する 2. 検査・評価・診断法を、臨床場面を想定して理解する 3. ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てる		○												○	○		○

学科目	科目の主題	科目の到達目標	ディプロマポリシーの項目番号															
			O:DP達成のために設定された到達目標と関連性がある※1つの達成目標に対して最大3個まで															
			DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6	DP7	DP8	DP9	DP10	DP11	DP12	DP13	DP14	DP15	
摂食嚥下障害学演習	摂食・嚥下障害について言語聴覚士が行う具体的な検査・評価・診断法について学ぶ。また、症状に対応した訓練、食形態や姿勢、食事介助方法、訓練実施上の危機管理等、臨床技術を習得することを目的とする。	1. 実際の臨床方法を演習し、ポイントを理解する 2. 検査・評価・診断法を想定して理解する 3. 論理的に考え、実践できる力を育てる		○												○		○
聴覚障害学演習	各種検査と補聴器特性の測定と評価方法を演習を通して学ぶ。実際に検査装置、測定装置を操作し、種々の聴覚検査の検査方法と評価、補聴器の適応特性の測定などについて演習を行う。	1. 演習を通じて、各種聴覚検査技術や測定技術を身に付ける。 2. 聴覚や補聴器、補聴器の適合状態を評価する力を養い、実践力を高める。 3. ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てる							○							○		
画像診断学演習	言語障害や認知機能障害を引き起こす脳神経系の構造あるいは機能的異常について画像を通して学ぶ。	1. 主要な画像診断法の特徴を理解する。 2. 言語障害を引き起こす神経疾患の画像的特徴を理解する。 3. 認知機能障害を引き起こす神経疾患の画像的特徴を理解する。	○							○	○						○	
言語聴覚障害学総合演習(検査・機器)	言語聴覚療法に必要な臨床心理・神経心理検査や聴覚検査機器等の機械・器具を概観し、検査の機械・器具についても学習する	1. 言語聴覚療法に必要な検査・機器について最新の知識を学ぶ 2. 代替コミュニケーション(AAC)や支援機器(AT)を用いることができる 3. 当事者のQOLを高める支援方法について学ぶ			○												○	○
言語聴覚障害学実習Ⅰ	この演習では学内の教員の下、言語聴覚障害者(成人領域)の症状について、情報収集(検査)・評価の流れを学習し、他の言語障害との違いを理解する。演習形式で様々な検査法や訓練法を理解し、実践できることを目標とする。	1. 言語聴覚障害者(成人領域)の症状について学ぶ 2. 情報収集(検査)・評価の流れを学ぶ 3. 様々な検査法や訓練法を理解し、実践できる力を育てる															○	○
言語聴覚障害学実習Ⅱ	対象者、スタッフとの円滑なコミュニケーションをはかるための基本的な対応について学習する。臨床に対する意識、コミュニケーションの基本的な態度、コミュニケーションスキル、豊かな人間性など医療従事者としての基本的な態度やスキルを習得することを目標とする。	1. 円滑なコミュニケーションをはかるための基本的な対応について学習する。 2. 臨床に対する意識を学ぶ 3. 医療従事者としての基本的な態度やスキルを習得する			○	○										○		
言語聴覚障害学実習Ⅲ	3年次行った評価実習を踏まえ、患者を適切に評価、統合的に解釈、問題を把握する力を育てる。問題を把握し、再評価を含めた、その問題に応じた言語聴覚療法プログラムを設定することを学ぶ。特に総合実習なので、仮説設定、訓練方法の立案、訓練の実施・スキル、再評価、仮説検証・修正の流れを理解し、実践できるようにする。	1. 患者を適切に評価、統合的に解釈、問題を把握する力を育てる 2. 問題に応じた言語聴覚療法プログラムを設定することを学ぶ 3. 仮説設定、訓練方法の立案、訓練の実施・スキル、再評価、仮説検証・修正の流れを理解し、実践できるようにする。			○	○											○	
言語聴覚障害学実習Ⅳ	演習を通じて、対象患者の実習の過程で言語聴覚士の社会的役割とチームワークの重要性、理論的・法的責任を理解し、言語聴覚療法実施上の総合的能力を高める。また、対象患者の心理的問題や家族が抱える悩みを理解し、共感する態度を学ぶ。そして、言語聴覚障害を抱えながらも生きていく対象患者を支援し、共感する態度を学ぶ。	1. 言語聴覚士の社会的役割とチームワークの重要性、理論的・法的責任を理解する 2. 言語聴覚療法実施上の総合的能力を高める 3. 心理的問題や家族が抱える悩みを理解し、共感する態度を学ぶ			○	○										○		
認知症特論	認知症は高齢化社会において重要な課題である。認知症の症候学、診断学、治療体系につき概説する	1. 総論について、診断学の歴史と最近の知見を学ぶ 2. 認知症の症候学について学ぶ 3. 認知症の治療体系について学ぶ		○				○			○							○
摂食嚥下障害学特論	現場での臨床業務に役立つ内容について、各講師が、それぞれの専門とする領域における最近の知見を交えて講義する	1. 脳卒中や神経難病による摂食嚥下障害や、栄養サポートチームでの役割について学ぶ 2. 耳鼻科疾患による摂食嚥下障害や、手術療法について学ぶ 3. 口腔生理学に基づく摂食嚥下障害への対応や補綴について学ぶ			○												○	○
卒業研究	臨床現場に出た後も、言語聴覚学を学び、研究し続ける姿勢を養うことを目的とし、その第一歩となる研究論文を完成させる	1. 学生自身に興味を持った研究テーマを選択し、そのテーマに合った研究デザインの作成を行う 2. テーマに沿った資料収集、データ収集、分析法、表現法などを学ぶ 3. 出来るだけ発表とディスカッションの場を多く設け、議論しつつ、論理的に、かつ科学的に研究を進める方法を学ぶ		○														○
専門ゼミⅠ	専門課程の幅広い内容について体系的に整理し、理解を深め、言語聴覚士という専門職として必要なスキルや知識を修得する	1. 臨床実習(評価実習)において臨床現場で修得した評価方法について説明できるようにする 2. 指導教官や他の学生とのグループ討論の中で理解を深める 3. 具体的な訓練プログラムの立案や実際の支援につなげていくことを学ぶ														○	○	
専門ゼミⅡ	本学を卒業後に言語聴覚士として臨床現場で円滑に働けるスキルや知識を修得する	1. 臨床実習(総合実習)において臨床現場で修得した評価方法及び訓練方法、支援方法を説明できるようにする 2. 指導教官や他の学生とのグループ討論や、個別指導の中でより理解を深める 3. これまでの学習の中で不足している部分について、学習を反復して行い、現場での実践に備える														○	○	○
臨床実習(見学実習)1週間	臨床実習(見学実習)は、1年次に実施した1日見学実習で得た、言語聴覚士の現場での学びを、1週間を通して、より詳細に把握する	1. 言語聴覚士の現場での臨床を詳細に把握する 2. 見学内容と机上での学びを結びつけることで、専門科目の理解を深める 3. より具体的な言語聴覚士像を掴む			○	○											○	
臨床実習(評価実習)4週間	臨床評価実習は、言語聴覚障害を持つ子ども、成人の症状を評価・診断できることを目標とする	1. 症例の症状を正しく測定し、評価を行う 2. 評価から正確な鑑別診断を行う 3. 評価と診断に基づいて実施される言語聴覚療法を理解する			○	○											○	
臨床実習(総合実習)8週間	それまで学んだ基本的知識と技術を応用し、臨床実習指導者の指導のもとに患者を介して言語聴覚療法評価・治療を体験する	1. 患者を適切に評価、統合的に解釈、問題を把握する 2. 問題に応じた言語聴覚療法プログラムを設定・実践し、さらに、再評価を行うことにより治療効果を検討する 3. 言語聴覚士の社会的役割とチームワークの重要性、理論的・法的責任を理解し、言語聴覚療法実施上の総合的能力を高める			○	○										○		